

有沢 旬平

「補綴装置製作で大切にしている事」

補綴装置の製作では、形態や色調だけでなく、咬合や清掃性、材料、構造など、さまざまな要素を考えながら製作を進める必要がある。また、より良い補綴装置を製作するためには、治療の過程で得られた情報をどのように捉え、製作へ反映していくかも大切である。私は院内技工士として、歯科医師と情報を共有しながら、症例ごとに必要な情報を整理し、補綴装置の製作につなげることを意識している。本講演では、多数歯補綴症例を中心に、日常臨床の中で私が確認していることや、製作時に大切にしていることについて紹介したい。

島村 亮平

「デジタルデザイン時代における審美修復～生命感のある歯牙形態表現～」

私が歯科技工士として働き始めてから約10年が経過し、その間、IOSの普及とともにラボワークも大きく変化・進化を遂げてきました。

現在では技工作業におけるアナログ工程の割合は年々減少し、歯牙形態を構築するワックスアップ作業においてもデジタルデザインのみで完結するケースが増加しています。

デジタル技工は作業効率や再現性、データマッチング、情報共有などの面で大きな優位性をもたらしています。しかし一方で、補綴物に天然歯のような生命感を与えるためには、依然としてアナログ技術による仕上げも必要不可欠であり、デジタル、アナログどちらも大切なスキルであると考えます。

本講演では、exocadを用いたデジタルデザインの利点を活かしたデジタルワックスアップから、表面性状や質感など生命感を与え口腔内に調和させるためのアナログ手技まで、私自身の日常臨床における、審美領域を含む補綴製作の流れについてご紹介したいと思います。

仮屋 準一

「診断用 Wax up の重要性」

近年、デジタル技術の発展により補綴治療は大きく変化しているが、治療計画立案における診断用 Wax-up の重要性は変わらない。診断用 Wax-up は、最終補綴装置の形態や咬合関係を事前に可視化し、歯科医師・歯科技工士・患者間で治療ゴールを共有するための有効なコミュニケーションツールである。特に矯正治療やインプラント治療を伴う複雑な症例では、補綴主導型の治療計画立案に寄与し、予知性の高い咬合再構成を可能にする。また、デジタル Wax-up との連携により、診査・診断から最終補綴装置製作まで一貫した情報活用が可能となる。本発表では、診断用 Wax-up の臨床的意義と歯科技工士の役割について症例を交えて考察する。